

公益財団法人やまがた教育振興財団
「教員養成に関する調査研究事業」
報 告 書

山形県の高等学校総合学科における主体的なキャリア形成と
カリキュラムの有効性に関する実態調査研究

平成 31 年 3 月

山形大学大学院教育実践研究科

研究代表者 准教授 青柳 敦子

1. 研究の目的

(1) 研究の概要

本研究は、学習者の主体性と多様性を尊重し、キャリア教育の充実を標榜する「総合学科」における取組の特徴と学習者のニーズを調査し、カリキュラムの有効性を探るものである。

研究対象は、山形県内の高等学校総合学科とし、その目的は以下の3つである。

第一に、創設から約25年が経過した県内総合学科の取組の特徴を調べ、在籍する生徒（抽出）が、総合学科での学びをどう捉え、どのような学習に意義を感じているのかを調査し、設立年度別に比較・検討する。

第二に、総合学科の特徴である主体的な科目選択や地域と連携した体験的・探究的な学びが、卒業後、どのような影響を与えているかを明らかにする。進路選択上、何が参考になったのか、どんな学びや体験が現在にどのように活かしていると捉えているのか、また、在学中にどんな授業やキャリア形成上の工夫があるとよいかを調査し、総合学科のカリキュラムの総点検をする。

第三に、教職大学院の授業「学校改善プラン開発実習」に代表される学校組織マネジメントやカリキュラム・マネジメントを扱う授業において、実践例が少ない高等学校におけるカリキュラム・マネジメントの具体例を示すことで、カリキュラム・マネジメント力をつけた教員の養成に寄与することである。

(2) 研究の狙い目とその設定等

① 高校教育における総合学科の歴史的な位置（研究課題の背景）

まず、高校総合学科について説明したい。1955年に50%だった高校進学率は、1975年には90%に達し、僅か20年で進学率が9割まで上がり、教育の急激な量的拡大、言い換えれば、教育の大衆化が一気に進んだ。現在（2017年）では、98.8%となっており、高校教育は、もはや一部の生徒のためのものではなく、中学校を卒業する生徒のほとんどすべてが高校に進学する全入時代の様相を呈しており、教育制度改革が急務となっている。

1991年の中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」では、「技術革新の進展等に伴い産業・就業構造が大きく変化している時代にあっては、将来の職業に明白な展望が持ちにくいなどの理由から、生徒が進路決定を先送りしている」点を指摘し、「従来の特定の職業のための職業教育だけではなく、あらゆる職業に共通の実際的な知識・技術を習得させることが求められている。」との認識から、「現在の普通科と職業学科に大別されている学科区分を見直し、普通科と職業学科とを総合するような新たな学科を設置することが適当と考えられる。」との提言がなされた。これを受け、総合学科は、普通科、専門学科に並ぶ新たな学科として1994年に創設された。昨年の学校基本調査によれば、総合学科をおく学校数は369校、約17万5千人（全体の5.4%）の生徒が在籍している。

総合学科は、佐藤学（1996）が評するように、従来の、画一的で一斉方式を打破した「『個性化＝選択』の原理を前面に打ち出した、答申の『目玉』に値する学科」であり、普通科と職業学科を統合する新たな学科として注目を集めた。事実、1998度における一般入試の受験倍率は普通科よりも高く、総合学科は普通科よりも魅力ある学科として期待

されていたことが伺える。設立から12年経過した2006年に300校を超えるに至るまで順調に学校数を伸ばしていった。

② 高校総合学科の直面する状況と課題

しかしながら、総合学科の学校数は、2006年以降横ばい状態が続いており、昨年の段階で369校にとどまっている。創設当初、500校を目指していたことを考えると、課題が垣間見える。

本県では、1995年に開設された県立庄内総合高等学校を皮切りに、現在8つの総合学科を有する学校がある。松村(2018)による県内総合学科状況調査によると、各学校に特色あるカリキュラムを指摘できる。他方、定員充足率については、2010年までは定員の9割を維持していたが、翌年に9割を下回り、その後は回復していない。ここには、総合学科のカリキュラムと進学してくる生徒のニーズがかみあっていないのではないかという課題を指摘できる。

③ 研究の狙い目とその設定

総合学科の最大の特徴は、「選択中心の教育課程」であり、生徒が自分の興味・関心や将来の職業を視野に、主体的に科目を選択できる自由度にある。併せて、必修科目「産業社会と人間」では、産業活動の体験、学校内における実習、地域で活躍する社会人との対話、意見発表と討論で構成され、より社会との接点を重視した体験型で探究型の学習を重視している。さらに、生徒が自分の進路希望に応じた類型、例えば、商業や情報科目を中心とする類型、福祉などの類型、普通科目を中心とする類型などから選択し、幅広い進路選択を可能にしている。すなわち、主体性と多様性を尊重し、高校3年間を通して、じっくり自分の進む道(キャリア)を考えることのできるカリキュラムに特徴がある。

こうした主体性と多様性の尊重は、山形県が重視する探究的な学びのあり方を先行して示すものである。

本研究が目指すのは、主体的な科目選択とキャリア教育を特徴とする総合学科にあって、カリキュラムの中で、何が有効に働いているか、また、高校3年間の学びを振り返った時に、どんな科目や活動を深めたかったか、学習者のニーズを卒業後の視点を軸に明らかにすることにある。そのことにより、学習内容とキャリア意識の醸成との接点を浮き彫りにし、総合学科におけるカリキュラムの再考に寄与することを試みる。

2. 研究成果の概要

(1) アンケートの実施と分析

本研究では、次の2点に沿って研究を進めた。

- ・調査1 山形県内の総合学科への聞き取り調査及び在校生へのアンケート調査
- ・調査2 山形県立高畠高校卒業生へのアンケート及びインタビュー調査

調査1では、県内8つの総合学科を有する学校に聞き取り調査を行い、それぞれの学校の系列の特徴や独自の取組、地域との連携について確認した。また、8校の在校生3年次(原則任意のクラス)にアンケート調査を行い、410名の回答を得た。

調査2では、研究協力校である県立高畠高等学校の卒業生約600人(5年分)を対象に

アンケート調査を郵送し、187名の回答を得た。回収率は33.3%であった。卒業生を対象に複数学年にわたっての追跡調査は、全国的にも珍しく貴重である。

調査の結果、以下の4点が明らかになった。

第1に、県内総合学科の設立時期毎の特徴として、初期群と後期群が特徴を活かした取組を行い、生徒の満足度も高いことと、すべての群で、「地域との連携」を活かした教育活動が、生徒の満足度と関係していることがわかった。総合学科の魅力をさらに高めるための今後のカリキュラム編成のヒントとなる点である。また、学習者の視点から絶えずカリキュラムの有効性を点検し、改善していくことの重要性も示唆している。

第2に、「選択の質」の向上と「学ぶ意義の実感」が、四半世紀経過した現在も、総合学科の成否を握っていることが浮き彫りとなった。

第3に、「地域との接点」を学びに活かすことの有効性である。新学習指導要領で提唱される「主体的・対話的で深い学び」の創造は、「地域との接点」を活かして主体的な学びを創造して来た総合学科こそが、これまでの経験を活かして牽引していくべきである。

第4に、本来3年かけてキャリア意識の醸成を図る制度設計になっているにもかかわらず、1年次前半で系列や選択科目を選び、その後の変更が非常に困難になっている現状が浮き彫りとなった。途中の選りなおしを可能にするためにも「セメスター制」（二学期制、すなわち半期単位認定制）の導入等を検討することが、総合学科の今後を展望するときに必要なことが明らかとなった。

(2) 先進校の調査

高校総合学科のカリキュラム改革の先進校として、大阪府立堺東高等学校の視察を8月に行った。この高校は、全国でも珍しい「セメスター制」を採用しており、1年の前期と後期で単位認定を行い、前・後期で別の科目が一部選択できるようなカリキュラムとなっている。この方式は、セメスター制の可能性を具体的に検討する上で、大いに参考になる。

3. 今後の取組及び期待される効果

調査の結果を受け、総合学科の魅力をさらに高めるには、「地域との連携」を活かした取組を深化させ、豊かな学びを通して学習者自身が「学ぶ意義を実感」する教育活動を展開させていくことが重要である。そして、3年間を通して自己の進路を見つめながら「主体的に科目選択」することを保証するためにも、「選り直し」が従来よりも柔軟にできるカリキュラム設計を考えていく必要がある。松村(2019)が提唱する「セメスター制」導入の可能性を具体的に探ることで、これからの総合学科のさらなる発展に貢献できるものとする。具体的なイメージは、次のページに示す図1の通りである。

さらに、調査結果から得られた知見を基に、教職大学院1年次の必修授業「組織管理の実践と学校」において、高等学校におけるカリキュラム・マネジメントの具体例を示し、学習者の学びの実態やニーズを捉えて、カリキュラムをどう改善するかを有するカリキュラム・マネジメント力をつけた教員の養成に寄与することが期待できる。

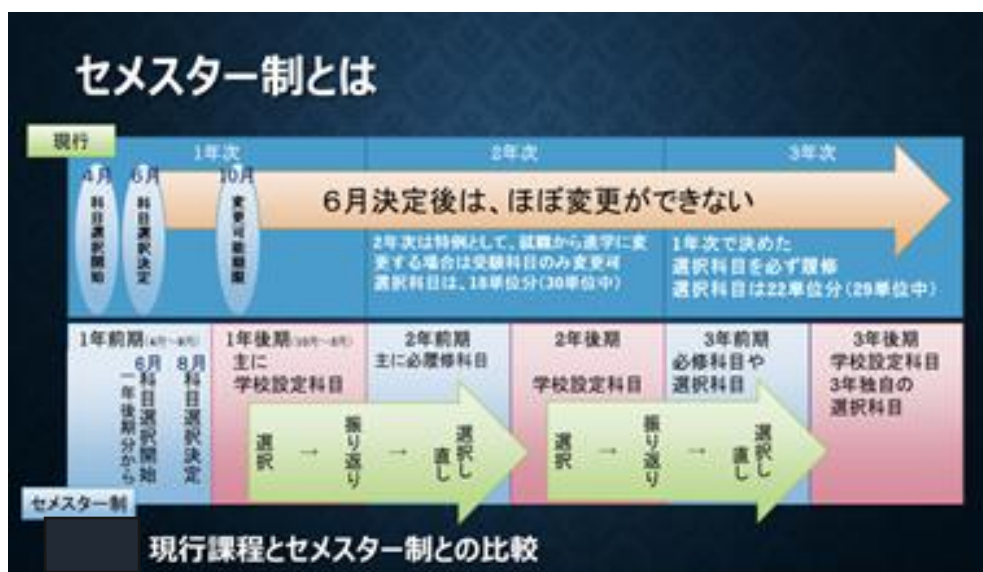


図 1 セメスター制のイメージ：松村（2019）より

引用文献

- 青柳敦子(2019)「山形県高等学校総合学科の特徴と学習者の評価に関する調査研究」,
『山形大学大学院教育実践研究科年報』第10号, 6-15.
- 松村将人(2018)「高校総合学科の魅力の再構築 - 地域との連携を基軸として -」,
『山形大学大学院教育実践研究科年報』第9号, pp.282-285.
- 松村将人(2019)「高校総合学科の魅力の再構築 - 学習者の視点に基づいたカリキュラム
再考 -」, 『山形大学大学院教育実践研究科年報』第10号, 192-199.
- 文部科学省(1991)「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(答申)」
- 佐藤学(1996)『カリキュラムの批評』, 世織書房.